

## ちりから囃子

「ちりから」とは長唄の囃子（ばやし）用語。「ちり」は大鼓（おおつづみ）、「から」は小鼓（こつづみ）の音をあらわす擬声音で、大鼓と小鼓で奏する長唄の囃子独特の手法をいう。長唄の囃子は能の囃子から出たものなのでその影響を残しているが、「ちりから」は能とは関係なく三味線のリズムや速さに合わせ、軽快に細かいリズムを大鼓と小鼓で打ち合わせる手法である。おもに曲の終り近くの「ちらし」の部分で活躍、囃子方の技量を示すことができる。一般に大鼓が表間、小鼓が裏間を打つ

囃子（ばやし）とは、お祭りや、お芝居、落語にぎやかにもりあげる音楽。笛、太鼓、鼓、銅鑼および鉦（かね）などの打楽器で演奏する。太鼓や鼓の演奏者は、かけ声もかける。囃子には色々な種類がある。

矢作川流域には、祭礼時に太鼓・笛などの楽器を囃し、簡単な屋台車とともに村内を練り歩く「囃子」は多く存在した。名称としては、「囃子（ばやし）」と呼んでいた地域が最も多い。「ちりから」という呼び名は、六ツ美地区で用いられていた。太鼓の音をそのまま呼び名とした。

「チャンチャンチャラボコ」という地域（岡崎北部）もあった。また、これから派生した呼び名として、「チャンチャンチャラのドンドン」「チャンチャンバラバラ」「チャラボコ」などがあった。この他に「本囃子」「屋台囃子」「底抜け囃子」「打ち込み」など、様々な呼び方がされていた。

囃子車の前部に小太鼓を設置し、後部に大太鼓を吊るすという形式が一般的である。囃子車には周囲に造花を取り付けて飾ったり、提灯を付けたりした。足助では、「花車」と呼ばれ、藤の蔓や、樹木と造花できれいに飾った。楽器としては、大太鼓・小太鼓・横笛が基本的なものであった。演じる人は圧倒的に若い衆が多かった。

六ツ美では八幡神社と日長社で「ちりから囃子」が伝えられている。八幡神社と日長社の「ちりから囃子」は、1898（明治30）年ころから行われたようである。八幡社は、横笛太鼓で山車の中で演奏して歩き回った。日長社は七福神で、三河万歳を演じた。日長社の「ちりから囃子」は現在行われていないが、子供の獅子舞が行われている。八幡社のちりから囃子は「はやし保存会」が伝統を児童に伝えている。また日長社と同様に子供の獅子舞も行われている。

### [七福神]

七福神とは、大黒天（だいこくてん）、毘沙門天（びしゃもんてん）、恵比寿天（えびすてん）、寿老人（じゅろうじん）、福祿寿（ふくろくじゅ）、弁財天（べんざいてん）、布袋尊（ぼていそん）の七つの神様の総称である。「七難即滅、七福即生」の説に基づくように、七福神を参拝すると七つの災難が除かれ、七つの幸福が授かると言われている。七福神の信仰は、室町時代の末期のころより生じ、当時の庶民性に合致して民間信仰の最も完全な形となって育てられてきた。そのなかでも、特に農民、漁民の信仰として成長し、現代に今も生き続けてきた。



本項は以下の資料を引用している。

**[わたしたちのふるさと 六ツ南 114 選]**

監修者 総代会長 平井 良美  
社教委員長 近藤 武美  
著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6 年児童 114 名  
(平成 25 年 3 月 19 日卒業)  
編者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6 年担任  
権田 康成、加納 隆、坂井 純、榊原 美佐子、山本 佳愛  
発行日 2013 (平成 25) 年 3 月 1 日 初版発行  
印刷所 ブラザー印刷株式会社  
製本 ブラザー印刷株式会社  
発行 岡崎市立六ツ美南部小学校

・日長社のちりから囃子

1986年、鈴木喜信氏（中島町本町）提供によるビデオを静止画に編集した。







- ・八幡社のちりから囃子  
1981（昭和56）年、つるや呉服店提供。



1981(昭和56)年八幡社ちりから つるや呉服店提供

- ・八幡社の子供の獅子舞  
1993（平成5）年、つるや呉服店提供。



1993(平成5)年八幡社子供の獅子舞 つるや呉服店提供

- ・八幡社のちりから囃子  
2015（平成27）年、石川祐之氏提供。



2015(平成27)年11月22日 八幡社ちりから囃子 石川祐之氏提供



2015(平成27)年11月22日 八幡社ちりから囃子 石川祐之氏提供



2015(平成27)年11月22日 八幡社ちりから囃子 石川祐之氏提供



2015(平成27)年11月22日 八幡社ちりから囃子 石川祐之氏提供



2015(平成27)年11月22日 八幡社ちりから囃子 石川祐之氏提供



2013(平成25)年10月13日 八幡社ちりから囃子